教育学者のあたふた子育て・親育ち(1)

母として保育者の専門性を考える(1)

佐久間亜紀

はじめに

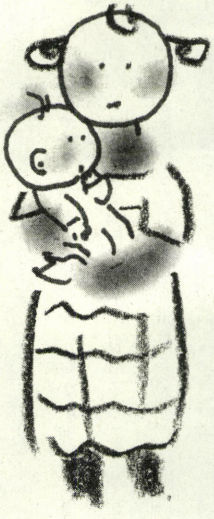
昨年出産し、母になりました。

早速、編集部から「教育学者として、母として、いま思うことを書いてみませんか」という依頼を何度もいただきましたが、そのたびにお断りしていました。私のパソコンは「キョーイクガクシャ」と入力すると「驚異苦学者」と変換してくれますが、本当に私はただ驚異的に苦学してきたような者で、「学者」なんていわれると赤面してしまいます。しかも、私の専門は学校教育学で、赤ちゃんも幼児も全くの初心者。毎日毎日、どたばた、あたふた、おろおろの生活を必死で送っているだけで、ほかのお母さん方と全く一緒です。

ただ、よく考えてみると、いままで教職の専門性を研究し、子どもや教師を支援する仕事をしてきた私が、支援する側から支援される側になって初めて感じたことはたくさんありました。支援される当事者として、助産師や医師、保育者や行政スタッフなど、「子育て支援」の専門家の皆さんと出会うと、「専門性っていったい何?」と考えさせられることばかりです。そして、

一人の「専門家」としての私自身のありさまについても、きびしく振り返ることを余儀なくされています。ていねいなご依頼を何度もいただくうちに、「あれこれと揺れ動く気持ちや、さまざまに思いあぐねた事柄を、文章としてとどめてみてもよいかもしれない」と思うようになりました。

私は幼児教育や保育については全くの門外漢ですが、私の個人的経験をご紹介することで何かのお役に立つのならと、初めての子育てに向き合いながら考えたことを、つづってみようと思います。



嵐は突然に

その日は突然にやってきました。ある日曜日の夕方、それまで何の病気もせず元気に育っていた娘が、急にひどい勢いで吐き始めました。娘が七か月になったばかりの晩秋のことでした。

何度も何度も吐き続け、顔も真っ青、とても苦しそうで、ただごとではない様子です。そのうち熱が上がってきて、ものすごい下痢が始まりました。ブリブリッ！　と音をたてて水様便がとびだし、衣服やシーツにあふれてしまいます。やっとのことで汚れたシーツやおむつを替えると、次のブリブリッ！　がやってきます。うんちの色もどんどん変化して、なんと、真っ白になってしまいました。これこそが噂に聞く「お腹の風邪の王様」、ロタウイルスとやらのしわざか。生まれて初めての病気だし、娘はかわいそうなくらいに苦しんでいましたが、不思議と私の腹は据わっていました。

というのも、思い当たる節があったのです。二日前に地域の子どもたちが集まる広場に参加していました。「きっとその時、ウイルスをもらってきたんだ！」。新米ママであっても、何が起こっているかが理解できれば、それなりに落ち着いて事態に対処することができます。娘と夫と一緒にひと晩頑張り、翌朝、小児科にかけこんで、事なきを得ました。

追いつめられた母の気持ち

しかし、それはその後何か月も続く長い苦闘の、ほんの始まりにすぎませんでした。それからというもの、やっと回復してきたかなと思うころにまた嘔吐し、ひどい下痢になることを繰り返すようになったのです。そのたびにひどい脱水症状になり、入退院を繰り返しました。

私が冷静でいられたのは二回目までした。原因のウイルス名が特定できたのは最初だけで、なぜ娘が短期間に何回も嘔吐下痢症を繰り返すのか、理解できませんでした。いったいわが子の身体に何が起こっているのだろう？　この先いったいどうなってしまうのだろう？　親戚や友人の「きっともう吐かないよ」「心配しすぎだよ」といったアドバイスは、もはや私の耳には届きませんでした。吐瀉物（としゃ）中のウイルスは数m飛び散って壁にも付着すると聞き、床ならず壁まで磨いて、狂ったように家中を掃除し続けました。ウイルスによる嘔吐で汚れた衣服やシーツは捨てさせる病院があると聞いては、すべてを処分し、洗濯機も除菌しました。家の空気の乾燥がよくないと聞いては、湿度計と加湿器も購入しました。もう必死です。娘がもう二度と吐きませんようにと、毎日毎日、祈るような気持ちで過ごしました。

一番つらかったのは、感染症をほかの赤ちゃんにうつしては悪いので、近所のママ友とも会えなくなり、スーパーなど人混みにも出られず、いわば自宅軟禁状態になったことです。疲労と孤独が、私の不安をますます増大させていきました。長年自宅軟禁されている

ミャンマーのアウン・サン・スー・チーさんの過酷を、何度想起したことでしょう。

育児の難敵は「不安」

初めての病気でも原因がわかっていれば落ち着いて対処できたのに、何がどうなっているのか理解できず先が見えなくなった時、私は心の底から不安になりました。そして不安のさなかでは、あらゆる理性が吹き飛ばされ、いつもの私でなくなってしまうのです。

いままで私は「苦学」し、対象を冷静に観察したり、データに基づいて多角的に分析したりする訓練を、いやというほど受けてきました。その私ですらこうなのです。学校で教師に理不尽な要求をつきつけて「モンスター・ペアレンツ」などと呼ばれる親たちも、きっと私のように、かかえきれない不安に押しつぶされそうになっているのではないかと思うようになりました。そもそも親は、専門家のようにさまざまな子どもを見てきた経験をもちませんから、見通しがもてない時には不安を抱くほうがむしろ自然です。「モンスター」なのは親自身ではなく、制御できないほどふくれあがってしまう「不安」のほうなのです。

専門家の追い打ち

ところが、学校の教師だけでなく、育児支援を掲げているはずの専門家たちですら、親を批判することが多くなっているのではないかと、感じることが度々ありました。

娘が四度目に吐き始めた時のことです。それまでは三回とも急性胃腸炎という診断でしたが、「もう一度吐くことがあったら、ただの不運ではすまされないですね」と担当医に告げられていたので、私は文字通り真っ青になりました。ところがその悪夢の日、なんと総合病院が休診で、ほかの小児科を受診しなければならなくなったのです。

私は、娘の発症から今までの経緯や病状を一覧表にして紙にまとめ、緊張して診察を待ちました。とても

混んでいたので、短時間できちんと説明しなければ、と思ったのです。待ち時間は永遠に感じられました。

やっと診察に呼ばれ、「昨晩から嘔吐と下痢がひどいのです。昨晩からおしっこが出ていません。二か月前から嘔吐と下痢を繰り返しています」と言い、すがる思いで経緯を書いた紙を差し出しました。ところが、医師は「嘔吐下痢症ね。はい、点滴しますから」のひと言だけいうと、病名と解説が書かれた小さな用紙を私に手渡し「次！」と別の患者を呼ぶではありませんか。

「ちょ、ちょっと待ってください、先生」あまりの対応に当惑した私は、そんなひと言すらも言えず、口をついて出たのは「あの、嘔吐と下痢を繰り返しているのですが」という言葉だけでした。するとどうでしょう。医師は、「だから嘔吐下痢症なんでしょう!?　点滴するって言ってるでしょう!?　何を心配しているかわからない！　次！」と言い、私の書いた紙を突き返してきたのです。呆然としている間に、看護師に背中を押されて、気づいたら診察室の外にいました。苦しむ娘に笑顔を向ける余裕どころか、これからどうすればよいのだろうと呆然と立ちつくしたのを覚えています。

対人専門職の専門性とは

半年を経たいまの私なら、あの日のあの場面を少し冷静に振り返ることができます。医師の態度は、なぜあのようになってしまったのでしょうか。

おそらく、この医師は自分は医師としての責任をしっかりと果たしていると言うに違いありません。彼は、短い時間できちんと診断し、検査や投薬や点滴の指示を出し、この日の娘の症状には的確に対処していたのだろうと思います。病気の説明さえ、あらかじめパンフレットを準備して患者に手渡すシステムにし、時間を節約していました。この医師は、患者を効率的に診断して待ち時間を短くし、一人でも多くの患者を診療することが、医師としての責任のとり方だととらえているのです。そんな彼にとっては、母親の要領を

得ない話にいちいちつき合うことは、ほかの患者を診る時間を犠牲することに等しかったのでしょう。

しかし私にとってみれば、この医師は娘の「症状」には対処してくれても、娘という「存在」には向き合ってくれなかったと感じたのです。この医師には、私の訴えに応答しようとする態度が感じられませんでした。実は、その後娘の胃に異常があることが判明するのですが、もしもこの時、この医師が母親である私の訴えに耳を傾けてくれていれば、娘はその後も苦しまなくてすんだかもしれません。

英語で「責任をもつ」「信頼できる」という意味をもつ「レスポンシブル（responsible）」という単語は、同時に「返事をする」「応答する」という意味も含んでいます。つまり、クライアントの話にしっかりと耳を傾け、きちんと応答することが「責任をとる」ということの中に含まれているのです。この医師は、この日の娘の症状に医学的に的確に対処したという点では、「結果責任」を果たしていましたし、症状と治療の説明が書かれたパンフレットを私に手渡したという点では「説明責任」も果たしていました。しかし、娘はなぜ長期間にわたって嘔吐下痢を繰り返しているのか、という私からの「問いかけ」に、専門家としてしっかり向き合おうとする「応答責任」を果たしていたかについては、少々疑問の余地が残ります。

いまどきの学校でも、多くの教師たちが「子どもの学力向上」に対処せよと求められ、皮肉にも一人ひとりの「子ども」に向き合うことが難しくなっていることが想起されます。

さて、私はその後、あの日の医師の態度に深く傷つきつつ、四月の保育園入園を心待ちにしていました。たくさんの赤ちゃんを見てきた保育士の方が、毎日娘の状況を一緒に見てくださるなら百人力、きっと未来がひらけるに違いないと希望をもったからです。しかし、その期待は残念ながら裏切られることになりました。（次号につづく）

（上越教育大学准教授）